

三宅尚斎の『家礼』関連著述について

——『朱子家礼筆記』『家礼雑記』など

吾 妻 重 二

On Works Related to Zhuxi's *Family Rituals* Written by MIYAKE
Shōsai: An Analysis of *Shushi Karei Hikki* and *Karei Zakki*

AZUMA Juji

It is well known that the school which began with YAMAZAKI Ansai, the so-called Sakimon-ha, had an extraordinary interest in Chu Hsi's *Family Rituals* (*Karei*). MIYAKE Shōsai was one of the leading figures of the Kimon school and wrote many works on the subject of *Family Rituals* such as *Shushi Karei Hikki*, *Karei Zakki*, etc. However, these writings have received little attention, and even the basic matters, such as what texts are exist and what their characteristics are, have not been investigated.

In this article, therefore, I will introduce Shōsai's writings related to *Family Rituals* and discuss their bibliography as well as the writings of some of his students. I believe that this work is necessary for further research into the thoughts and practices of Shōsai and the Sakimon-ha in relation to "*Family Rituals*".

Keywords: Kimon School, Confucian Rituals, TAKAGI Ryōhō, IWASAKI Shusai,
AJICHI Shūkyo, YOSHITAKE Hōmei

キーワード：崎門派、儒教儀礼、高木良央、岩崎守斎、味池修居、吉武法命

はじめに

山崎闇斎に始まる学派、いわゆる崎門派が朱熹の『家礼』に並々ならぬ関心を抱いていたことはよく知られるとおりである¹⁾。三宅尚斎はそうした崎門派の代表的人物の一人であり、『家礼』に関する著述を多く残している。『朱子家礼筆記』、『家礼雑記』などがそれであるが、しかしこれらの著述はこれまで

1) 吾妻重二編著『家礼文献集成 日本篇』九（関西大学東西学術研究所資料集刊二十七―九、関西大学出版部、二〇二一年）参照。同書には山崎闇斎と浅見綱斎の『家礼』関連著述を影印してある。また田世民『近世日本における儒礼受容の研究』（ぺりかん社、二〇一二年）、松川雅信『儒教儀礼と近世日本社会——闇斎学派の『家礼』実践』（勉誠出版、二〇二〇年）。

ほとんど注意されることがなく、どのようなテキストがあるのかなど、基本的な事項についてすら調べられていなかった。

そこで本稿では、これら尚斎の『家礼』関連著述を紹介するとともに、書誌的事項につき考察することとした。あわせて尚斎の門人たちの著述についても触れたい。これは地味な作業ではあるが、しかし今後、尚斎や崎門派の人々の『家礼』思想や実践の研究をいっそう進めるために必要なことと考える次第である²⁾。

一 『朱子家礼筆記』

1 三宅尚斎と『朱子家礼筆記』

三宅尚斎（一六六二—一七四一）は山崎闇斎から教えを受けた直弟子で、佐藤直方、浅見綱斎とともに崎門三傑と称される著名な学者であった。その生涯をざっとたどっておけば、播磨（兵庫県）の人で、名は重固、字は実操、通称は儀左衛門、のち丹治。尚斎は号である。はじめ京都に出て医術を学んだが、十九歳で山崎闇斎に入門、三年後に闇斎が没してからは直方、綱斎に兄事して頭角を現わした。のち忍藩主の阿部侯に仕えて江戸に出るが、四十六歳の時、諫言が聴き入れないため致仕を請うたことから藩主の怒りをかい、忍藩城内（埼玉県行田市）の牢に二年近く監禁されてしまう。このとき牢内でたまたま釘を一本見つけ、指を刺して出た血で書いたとされるのが『狼毫録』である。不拔の精神の持ち主というべきであろうか。

のち釈放されると、宝永七年（一七一〇）、四十九歳で京都に学塾を開いた。貧窮の中で講義を行なううち名声次第に聞こえ、諸大名に招かれて進講するものの、享保八年（一七二三）以後は京都に戻って著述と教育に専念、享保十八年（一七三三）には京都西洞院に、朱熹の小学・大学の構想にならって培根堂・達支堂の二つの学塾を設けて多くの門人を育成した。性格は剛直ではあったが温厚誠実な人格の陶冶につとめたという。

その学問はもっぱら朱熹および闇斎の学説を祖述、整備するもので、筆記と称する中国典籍の注釈・解説が写本として数多く残されている。すなわち『易本義筆記』十一冊、『易学啓蒙筆記』三冊、『朱易衍義筆記』一冊、『洪範全書』一冊、『詩経筆記』二冊、『四書章句筆記』二十五冊、『論語筆記』四冊、『大学或問筆記』一冊、『中庸輯略筆記』一冊、『近思録筆記』二冊、『太極図説筆記』二冊、『西銘筆記』一冊、『小学筆記』二冊、『孝経刊誤筆記』一冊、『敬斎箴筆記』一冊、『拘幽操筆記』一冊、『白鹿洞揭示筆記』一冊などであり、『朱子家礼筆記』九冊はその筆記の代表作の一つである。また著作として『黙識録』六卷、前にも触れた『狼毫録』三卷などがあり、語録に『尚斎先生雑談録』四冊が伝わっている。祖先祭祀との関係でいえば『祭祀来格説』一冊（延享五年刊本）およびその講義録である『祭祀来格説講義』（写本）が、鬼神の来格を理気論により展開したものと知られる³⁾。

2) 本稿は吾妻重二編著『家礼文献集成 日本篇』十（関西大学東西学術研究所資料集刊二十七—十、関西大学出版部、二〇二二年）の解説を補訂したものである。

3) 西順蔵・阿部隆一・丸山真男校注『山崎闇斎学派』（日本思想大系三十一、岩波書店、一九八〇年）には尚斎の著作

さて、『朱子家礼筆記』は現在、写本でのみ伝わる。筆者がまず調べたのは福井県小浜市立図書館・酒井家文庫蔵の『朱子家礼筆記』全九冊である（以下、小浜本と略称）。内題は「朱子家礼筆記」だが外題は「文公家礼筆記」、請求番号は「崎四二二」、大きさは二七×一八・六センチ、楷書による精写本である。酒井家文庫が旧小浜藩主酒井家の伝えた崎門派の文献群であることはよく知られるとおりで、あとに述べるように、この小浜本は同書の諸テキストのうちでも特にすぐれたものと考えられる。

さて、本書撰述の方針に関しては、序に相当する識語「朱子家禮開講口講」に次のようにある。小注は省いて、正文の全文を引用しておく（図1）。

朱子家禮開講口講

夫禮者恭敬退讓之理、而必本於天地、固有於人心。其用之行者、自冠昏喪祭之大、至於起坐進退之微、無時不有、無事不存。其實之存於内者、恭敬辭讓也。其文之著於外者、儀章疏數也。其理之固有而其實之存於内者、通古今互遠近、無有異者矣。其用之行而其文之著者、有古今異宜、土俗異制焉。是以聖人之制禮也、本其固有而不易其俗尚、據存於内者以爲之品節、故措則正、施則行。後之言禮者、不達其意、拘時俗者、愚禮不本於固有、主本實者、直情而遺乎制度文爲矣。二皆非體用本末之全也。朱先生於千載之下、因當時所用者而斟酌之以古禮、著書五篇爲一家禮。吾 邦地隔萬里、俗殊時亦異矣。學者善讀此篇、有得於因以斟酌之之意焉、則庶幾於禮之全體、莫所失云。

享保十一年丙午十一月 三宅重固識

（夫れ礼なる者は恭敬退讓の理にして、必ず天地に本づき、^{もと}固より人心に有り。其の用の行なわるる者は、冠昏喪祭の大なるより、起坐進退の微に至るまで、時として有らざる無く、事として存せざる無し。其の^{じつ}実の内に存する者は、恭敬辭讓なり。其の^{ぶん}文の外に著わるる者は、儀章疏数なり。其の理の固有にして其の^{じつ}実の内に存する者は、古今を通じ遠近に亘りて、異なる者有る無し。其の用の行われて其の^{ぶん}文の著わるる者は、古今^{よろ}宜しきを異にし、土俗^{せい}制を異にする有り。是を以て聖人の礼を制するや、其の固有に本づきて、而も其の俗尚を易えず、内に存する者に^よ拠りて、以て之が品節を為す。故に^お措けば則ち正しく、施せば則ち行なわる。後の礼を言う者は其の意に達せず、時俗に^{とら}拘わるる者は礼を^{よこしま}愚にして固有に本づかず、本実を主とする者は直情にして制度文爲を遺る。二つは皆な体用本末の全きに非ざるなり。

朱先生、千載の下に於て、当時用うる所の者に因りて、而も之を斟酌するに古礼を以てし、書五篇を著わして一家の礼と為す。吾が邦、地は万里を隔て、俗^{こと}殊なり時も亦た異なる。学者、善く此の篇を読み、因りて以て之を斟酌するの意に得る有らば、則ち礼の全体に失する所^な莫きに庶幾^{ちか}からんと云う。

享保十一年丙午十一月 三宅重固識す。）

として『敬斎箴筆記』、『拘幽操筆記』などを収める。

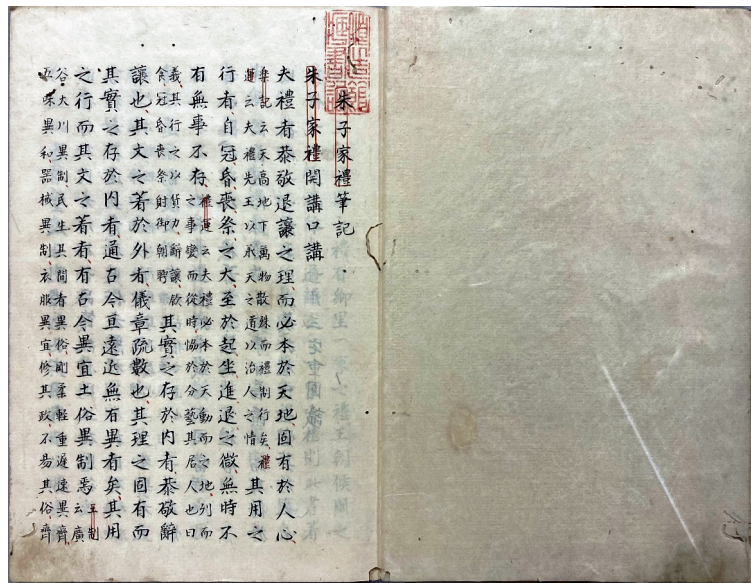


図1 小浜本『朱子家礼筆記』

ここで尚斎は朱子学の思想にもとづき、人心に固有で普遍的な「理」と、古今・風俗の違いの中で実施される「用」を区分し、これらを「体用」「本末」に分類している。「理」は普遍的でいかなる時代、いかなる地域にも当てはまり、「恭敬辞讓」の内面的心情として存在する。一方、用はそれぞれの時代や地域の実情に合わせて行なわれるもので、「儀章疏数」の外面的文飾として作られる。わかりやすくいえば、人としての本質に根ざしつつ、個々の状況に合わせて実行されるのが「礼」だというのである。そのことを尚斎は「其の固有に本づきて、而も其の俗尚^かを易えず、内に存する者に^よ拠りて、以て^{これ}之が品節を為す」というふう述べている。これは『礼記』王制篇の「其の俗を易^かえず」にもとづく発想で、固有普遍の理にもとづきつつ、しかもその土地の風俗に逆らわず、また人心の内に存する真実にもとづいて具体的な儀礼文飾を定めていくという。そして、こうすることではじめて理と用の双方を全うすることができるというのである。

さらに「朱先生」の「書五篇」すなわち朱熹の『家礼』について触れ、かつて朱熹が宋代の習俗に沿いつつ古礼を「斟酌」して『家礼』を撰述したのと同様、遠く離れた日本においても、日本の風俗に沿いつつ『家礼』を「斟酌」することは可能ならず、そうすれば「礼」の本質を失うことはなからうと述べている。日本の国情の中で『家礼』の儀礼をできるだけ活かそうという立場がうたわれているのであって、原則と応用に関するこうした方針は崎門派の強調するところでもあった。

識語末尾に記されるように、この講義は享保十一年（一七二六）十一月、尚斎六十五歳の時に行なわれた。冒頭に「朱子家禮開講口講」とあるのは、これが講義の際に用いられた控えであることを示している（あとにいう碩水本は「口講」を「口義」とする）。本書は『家礼』全般にわたる注釈であるが、すべて漢文で書かれていることからして、「筆記」というのはこの場合、講義のためのノートという意味で、尚斎はこれを資料として用いつつ講義したのであろう。右に触れた尚斎の筆記類のうち、関西大学総合図書館の泊園文庫に蔵される『近思録筆記』や『小学筆記』、中村幸彦文庫に蔵される『論語筆記』、『中庸章句筆記』、『中庸輯略筆記』などもみな漢文で書かれている。浅見綱斎の『家礼師説』や、綱斎門

人の若林強斎『家礼訓蒙疏』は講義を門人が筆録した講義録であり、和文の口語で記されているのに対し、尚斎のこれら筆記類が漢文で書かれているのは、講義の記録ではなく講義用の資料集だからである。

この『朱子家礼筆記』は『家礼』の正文と朱熹自注についてのきわめて詳細な注釈となっている。ざっと見ても『儀礼』や『礼記』などの三礼文献や朱熹の『文集』『語類』、二程や張載の著作、明の丘濬『文公家礼儀節』、周応期『家礼正衡』、胡広ら『性理大全』といった中国の文献、さらに朝鮮・曹好益『家礼考証』や山崎闇斎『文会筆録』、浅見綱斎『家礼師説』など、十八世紀初頭において参照可能な中国、朝鮮および日本の文献をできる限り利用した著述になっているといえる。ただし、綱斎『家礼師説』や強斎『家礼訓蒙疏』で詳述されたような、日本ので実践する場合はどのようにするかという日本の改変についてはほとんど触れておらず、『家礼』の忠実な注解に徹している点が特色となっている。名物や礼制に関しても懇切丁寧な説明を施しており、おそらく日本で著わされた『家礼』注釈書としては最も詳しいものの一つで、『家礼』研究のために今でも有用な内容をもっているといえよう。

尚斎が『家礼』を講じるにあたって底本として用いたのは、元禄十年（一六九七）に刊行された浅見綱斎校点の和刻本『家礼』である。それを示すのが本書末尾の「跋」の存在であって、そこには「一童行」「所謂非嫡長子不敢祭其父」の見出し語を掲げているのだが、これらは綱斎校点本に附された跋（綱斎識語）の中の語である。このほか本書の目次が、細目を含めて浅見綱斎校点本とまったく同じであることも注意される。綱斎が尚斎の兄弟子であったことからして、講義の底本に綱斎校点本が用いられるのはごく自然なことであらう。

このほか、朝鮮・曹好益（一五四五—一六〇九）の『家礼考証』がしばしば引用されているのも興味深い。曹好益『家礼考証』は綱斎『家礼師説』や新井白石『家礼儀節考』も活用しており⁴⁾、日本の『家礼』受容における朝鮮学者の影響を示す事例として記憶にとどめておいてよい著作である。ただ、一つ注意しておきたいのは、本書で曹好益を「金芝山」として引用していることである。調べてみるとそれらはみな曹好益『家礼考証』からの引用である。曹は号は芝山といい、したがって、号で呼ぶのであれば曹芝山でなければならないが、『家礼考証』には金埴（一五八〇—一六五八）が序を書いているため、おそらくそれと混同したのであろう。金埴は曹好益の門人である。

2 小浜本について

次に、小浜本の書誌的特色について述べておきたい。

まず、巻末に「寛保二^{壬戌}仲夏既望 高木良央謄寫之」の識語がある。寛保二年（一七四二）は尚斎死去の翌年であり——尚斎は寛保元年正月没——、したがってこの小浜本は尚斎の没後まもなく、高木良央が尚斎の手稿本を「謄寫」、すなわち書き写したものであるということになる。

高木良央について詳細は未詳だが、阿部隆一「大倉精神文化研究所蔵 崎門学派著作文献解題⁵⁾」を

4) 浅見綱斎『家礼師説』は注1 吾妻重二編著『家礼文献集成 日本篇』九に、新井白石『家礼儀節考』は吾妻重二編著『家礼文献集成 日本篇』五（関西大学出版部、二〇一六年）に、それぞれ影印した。

5) 『阿部隆一遺稿集』第三巻・解題篇二（汲古書院、一九八五年）四四五頁。

見ると、高木の著作として、闇斎の「経名考⁶⁾」を漢文で解説した『経名考筆記』が挙げられている。阿部氏は高木について「伝未詳」としているが、同解題によると、『経名考筆記』の高木の自跋に「元文四年己未二月朔旦高木良央書」とあり、続いて味池修居（一六八九—一七四五）による識語に「右考索甚精矣。……元文己未四月望日 味池修居」と、この高木の著を高く評価している。「元文四年」と「元文己未」は同年の一七三九年であり、尚斎の最晩年にあたっている。ここに名前が出る味池修居は後述するように、綱斎と尚斎に学んだ人物で、『綱斎先生文集』十三巻の編者でもある⁷⁾。こうしたことから見て、高木良央は味池と同様、崎門派の忠実な学徒であり、尚斎晩年の門人かと思われる。

このように、小浜本は尚斎死去の翌年、門人高木良央が尚斎の手稿本を筆写したものと見られ、同書のテキストとしては最も信頼に値するものといえよう。楷書で丁寧に浄書され、人名や書名など固有名詞の上に朱筆で二重線を引いて見やすくしてあること、難解な箇所には墨筆・朱筆で訓点を加えられていること、行間や欄外に朱筆小字で追記がなされていることなど——これらの書入れは高木良央の謄写以後になされたものかもしれないが——、推敲・点検を重ねて整理されたテキストとなっている。

小浜本が善本であることは他の写本と比べることによっても確認できる。この書の写本には他に九州大学附属図書館・碩水文庫本や無窮会・平沼文庫本などがあり、次にそれらとの異同を見てみたい。

まず九州大学附属図書館・碩水文庫本（以下、碩水本と略称）は全七冊で、整理番号はカ十二、内題は「朱子家礼筆記」、外題は「家礼筆記」である。欄外や行間に朱筆・墨筆による多くの書入れがあるのが特徴で、小浜本その他によって誤字等を校訂しているのが注意される（図2および図3）。碩水本の書入れに関し、小浜本と碩水本を対照させていくつか例を示せば次のとおりである。



図2 碩水本（九州大学）『朱子家礼筆記』巻頭

6) 「経名考」は闇斎『垂加草』附録に所載。『山崎闇斎全集』巻二（ぺりかん社復刻、一九七八年）二四三頁。

7) 味池修居については、川島右次「味池修居先生」（伝記学会編『増補 山崎闇斎と其門流』所収、明治書房、一九四三年）参照。

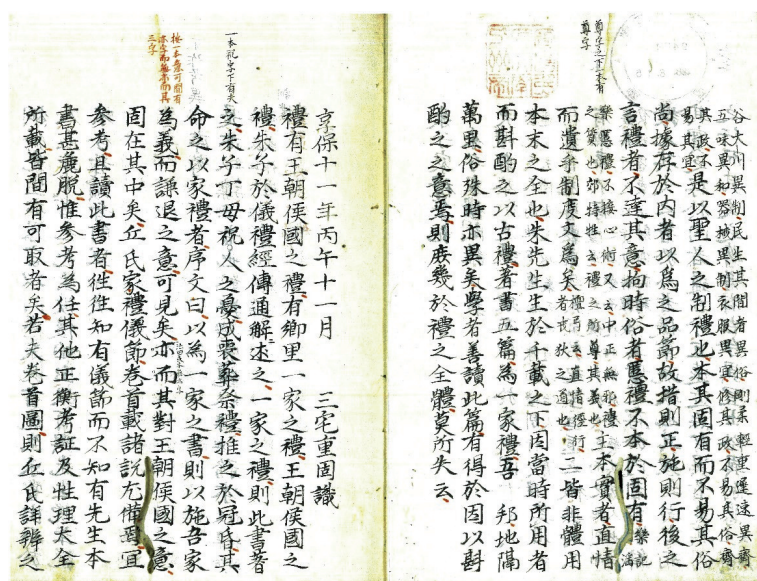


図3 碩水本（九州大学）『朱子家礼筆記』（続き）

一、〔小浜本〕土俗異制（第一冊冒頭部分、以下、五まで同じ）

〔碩水本〕土俗異制

書入れ：土一本

二、〔小浜本〕禮之所尊、尊其義也

〔碩水本〕禮之所尊、其義也

書入れ：尊字之下一本有尊字

三、〔小浜本〕朱子丁母祝夫人之憂

〔碩水本〕朱子丁母祝人之憂

書入れ：一本祝字下有夫

四、〔小浜本〕謙退之意亦可見矣、其對王朝侯國之意

〔碩水本〕謙退之意可見矣、亦而其對王朝侯國之意

書入れ：按一本意可間有亦字、而無亦而其三字

五、〔小浜本〕序考異

〔碩水本〕序考

書入れ：一本作考異

六、〔小浜本〕亦不死其親之意 問家廟在東（第一冊、通礼、祠堂章小注）

〔碩水本〕亦不死其親之意問家廟在東

書入れ：意問間、一本空一字

七、〔小浜本〕帘、鄭司農云、平帳也、玄謂帘帳中坐上承塵也（第二冊、冠礼、帘幕）

〔碩水本〕帘、鄭司農云、平帷也、玄謂帘幄中坐上承塵也

書入れ：平帷一本作平帳空、幄中一本作帳中

これらを見ると、いずれも小浜本により誤字を訂正したものであって、ここにいう「一本」の記述はほかならぬ小浜本に一致している。訂正内容について見ても、一の「土俗」、二の「尊其義」、三の「祝夫人」、いずれもそのようでないという意味が通じないし、四も碩水本のままでは意味が通らず、五も「序考異」（序の考異）でなければならない。また、六についても一字を空けるのが意味の切れ目からして妥当であり、七は『周礼』天官冢宰・幕人の注の引用で、これまた「平帳」「帳中」に作るのが正しい、といったごとくである。つまり、碩水本には軽率な誤記があちこちに見られ、それをのちに小浜本によって訂正しているわけである。

また気づいたところでは、喪礼「斬衰三年」条の辟領のところに「左領」「右領」と記した図が紙を切り抜いて貼られ、折りたたんだ紙が広げられるようになっているのだが、碩水本にはそれがないという不備も見られる。

ただし、碩水本は小浜本には見られない注記も加えられている。二、三例を挙げれば、通礼・祠堂章「祠堂之制三間」内の小注「禁秘鈔」の右側行間に「順徳院御製作ナリ」と書入れがあり、この一段の末尾「祠堂三間亦由于此乎」のあとには「新按、適士二廟之事見于祭法篇」とある。また続く「按古人家廟之制」に始まる一段内の「室直清」の左側行間には「東武侍講、俗称新介、仕于有徳廟・惇信廟之二朝」と書入れられている。これらはいずれも記述内容に関する補説であって、碩水本が筆写されたあと、理解に便ならしめるためさらに付記されたものである。碩水本は小浜本にはない独自の補充が書き加えられていることになる。

このほかいちいち紹介は省くが、碩水本は「一本」にいう所説が小浜本と異なる場合もあるので、同書の他の転写テキストによって校訂しているところもあるようである。

これらのことは結局、『朱子家礼筆記』が尚斎以後、複数の転写本が作られたこと、小浜本はそのうちでもすぐれたテキストであること、碩水本はやや軽率な転写であったが、のちに小浜本をはじめ他の転写本や諸文献を用いて校訂や補説を加えていることなどを示している。

もう一つ、無窮会・平沼文庫に蔵する一本について述べれば、四巻四冊の写本で内題は「家禮筆記」、外題は「家禮三宅氏筆記」、請求番号は平沼文庫・蔵書目録第二輯の九八六二で、内田周平旧蔵書である。この平沼文庫本は欄外に書入れられた校記が碩水本とほぼ同じことからして、碩水本の転写本と思われる。ただし完本ではなく、通礼部分を欠いて冠礼から始まり（第一冊見返しに「首 通礼 闕」と記す）、喪礼も「二曰齊衰三年」以下の「成服」（喪服制度）部分と「反哭」以下を欠き、さらにこれに続くべき祭礼部分をまるごと欠いている。これを要するに、平沼文庫本は碩水本の第一冊、第五冊および第七冊の三冊を欠く不全本ということになる。

『朱子家礼筆記』には他の写本として無窮会・神習文庫本（全十冊）、大倉精神文化研究所本（全九冊）、蓬左文庫本（全八冊、道学資講四六一五三）もある。これらは未見だが、大倉精神文化研究所蔵本は同附属図書館の蔵書検索によれば「天保丙申」すなわち天保七年（一八三六）の写本、蓬左文庫の道学資講は幕末に近い嘉永四年（一八五一）、中村得斎によって集成されたものであるから、これらの転写時期は小浜本よりも遅れるものである。

二 『家礼雑記』

『家礼雑記』一冊は『朱子家礼筆記』と同じく小浜市立図書館・酒井家文庫蔵で、全六十五葉。請求番号は「崎五九九」、大きさは二七・二×一九・四センチ、外題は「家礼雑記」で、版心には「文公家禮雜記」とある（図4および図5）。



図4 小浜本『家礼雑記』巻頭

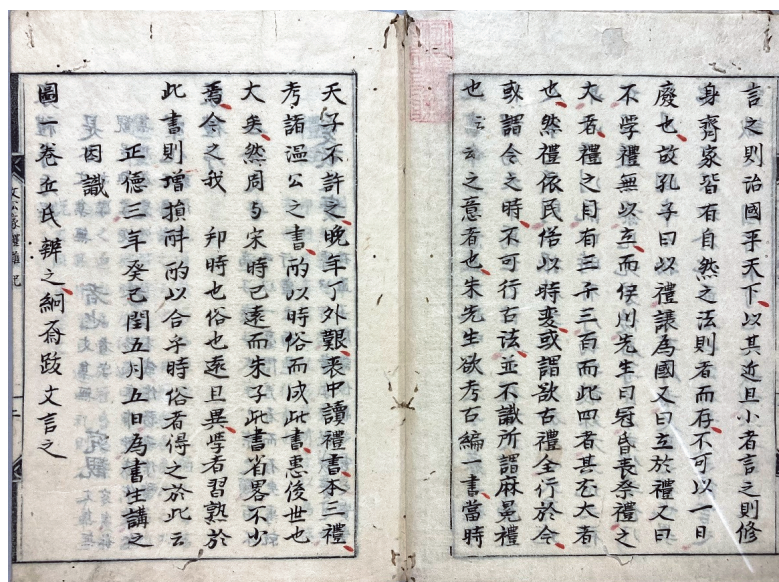


図5 小浜本『家礼雑記』（続き）

この書は三宅尚斎の著述を中心に、『家礼』の喪礼および祭礼に関する崎門派の人々の著作を集めたもので、この中の尚斎の著述は『朱子家礼筆記』撰述のためのノートのような性格をもっている。本書冒

頭の識語に「正徳三年癸巳閏五月五日、爲書生講之、因識」とあるように、正徳三年（一七一三）閏五月、尚斎が門人のために『家礼』を講じた時の記録から始まっており、これは尚斎が京都に戻って開塾してから四年後、また前述の『朱子家礼筆記』を撰述する十三年前にあたっている。

この識語によって尚斎の『家礼』理解を改めて見ておきたい。以下、全文を掲げておく。

此書命名之意、蓋言此唯爲朱子一家之禮耳、非謂爲天下萬世之法矣。

夫禮者天理之節文、人事之儀則、本根於天地、固有於人心。天尊地卑、山峙川流、四時有序、萬物散殊者、天地之禮也。父嚴子恭、兄先弟後、君尊臣卑、夫倡妻從、凡日用之間、事々物々、有其序者、人事之禮也。異端之徒不知於此、而妄以出於聖人之僞言之、豈識人心固有不可已之義哉。以其遠且大者言之則治國平天下、以其近且小者言之則修身齊家、皆有自然之法則者而存、不可以一日廢也。故孔子曰以禮讓爲國、又曰立於禮、又曰不學禮無以立、而伊川先生曰冠昏喪祭、禮之大者、禮之目有三千三百、而此四者其尤大者也。然禮依民俗以時變、或謂欲古禮全行於今、或謂今之時、不可行古法、並不識所謂麻冕禮也云々之意者也。

朱先生欲考古編一書、當時天子不許之、晚年丁外艱、喪中讀禮書、本三禮、考諸溫公之書、酌以時俗而成此書、惠後世也大矣。然周與宋、時已遠而朱子此書省略不少焉。今之我 邦、時也俗也、遠且異、學者習熟於此書、則增損斟酌以合乎時俗者得之於此云。

（此の書命名の意は、蓋し此れ唯だ朱子一家の礼と為すと言うのみにして、天下万世の法と為すと謂うに非ず。

夫れ礼は天理の節文、人事の儀則にして、本と天地に根ざし、固より人心に有り。天尊く地卑しく、山峙へ川流れ、四時に序有り、万物散殊する者は、天地の礼なり。父嚴に子恭に、兄先だち弟後れ、君尊く臣卑しく、夫倡え妻従い、凡そ日用の間、事々物々、其の序有る者は、人事の礼なり。異端の徒は此を知らずして、妄りに以て聖人の偽に出でて之を言う、豈に人心の固有にして已むべからざるの義を識らんや。

其の遠く且つ大なる者を以て之を言えば則ち治国平天下、其の近くして且つ小なる者を以て之を言えば則ち修身齊家、皆な自然の法則なる者有りて存し、以て一日も廢すべからざるなり。故に孔子、礼讓を以て国を為むと曰い、又た礼に立つ曰い、又た礼を学ばざれば以て立つこと無しと曰い、而して伊川先生、冠昏喪祭は礼の大なる者なり、礼の目に三千三百有るも、此の四者其れ尤も大なる者なりと曰う。然れども礼は民の俗に依り、時を以て変ず。或いは古礼を全く今に行なわんと欲すと謂い、或いは今の時は古法を行なうべからずと謂うは、並びに所謂る麻冕は礼なり云々の意を識らざる者なり。

朱先生、古を考え一書を編まんと欲するも、当時天子之を許さず。晩年、外艱に丁い、喪中に礼書を読み、三礼に本づき、諸を温公の書に考え、酌むに時俗を以てして此の書を成す。後世に恵むや大なり。然れども周と宋とは、時已に遠ければ、朱子の此の書、省略すること少なからず。今の我が邦、時や俗や、遠くして且つ異なる。学者此の書に習熟すれば、則ち増損斟酌して以て時俗に合する者、之を此に得んと云う。）

長文だが、趣旨は先に見た『朱子家礼筆記』の方針と重なっている。冒頭にいう、礼が「天理の節文、人事の儀則」であるとは、よく知られた朱熹の定義的説明である⁸⁾。そして、礼が天理にもとづく、人心に固有の普遍的なものであるという前提に立ち、冠婚喪祭の儀礼を伊川（程頤）に賛同しつつ重視する。ただし、時代や風俗によって儀礼は異なることから、朱熹は三礼文献や温公（司馬光）『書儀』を用い、宋代の時俗を斟酌しつつ古礼を省略して『家礼』を著わした。これと同様、遠く離れた日本においても、「我が邦」の「時俗」にかなうよう増損斟酌を加えることができるだろうといっている。文中にいう「麻冕は礼なり云々の意」は『論語』子罕篇に出典があり、麻糸で編んだ冕（かぶり物）につき、孔子が古礼どおりではなく当時の時俗に従うとした故事をふまえ、儀礼実施における柔軟な対応の必要性を説いている。

本書にはこの識語のあと、さまざまな小篇が続いている。各篇の内容と識語を列挙すれば次のようになる。

『家礼』講義の事由（第一葉～第二葉）

〔識語〕正徳三年癸巳閏五月五日、爲書生講之、因識。

〔内容〕上述のとおり。

読朱子家礼筆記（第二葉～第四葉）

〔識語〕正徳乙未歳十月廿五日／右讀朱子家禮筆記

〔内容〕家礼図と家礼序のみの注。正徳乙未は正徳五年（一七一五）。

祭礼（第五葉～第十四葉）

〔識語〕なし

〔内容〕『家礼』祭礼部分の注

喪服制度（第十五葉～第十八葉）

〔識語〕正徳三^{癸巳}年八月二日 尚齊識

〔内容〕『家礼』の喪服制度に関する注。

深衣考（第十九葉～第二十一葉）

〔識語〕なし

〔内容〕『家礼』通礼の「深衣」に関する考証。和文。

祔位祔祭諸図（第二十二葉～第二十六葉）

〔識語〕正徳三^{癸巳}年陽月初二 尚齋識

〔内容〕祭礼における祔位の神主の位置を考証する。正徳三年（一七一三）十月二日。

夫婦合葬之表（第二十七葉）

〔識語〕右'通。秋岡立齋・岩崎守齋^三同説也。或云、相換左右爲是、更思。

〔内容〕夫婦合葬の墓表の書式。秋岡立齋は未詳。林立齋か。岩崎守齋は浅見綱齋門人、名は修敬。

宗林居士松井翁墓（第二十八葉～第三十二葉）

8)『論語集注』学而篇「礼之用、和為貴」章。

〔識語〕三輪希賢識。

〔内容〕宗林居士松井翁らの墓表および神主の書法。三輪希賢（執斎、一六六九—一七四四）は佐藤直方門人だが、のち陽明学に転向した。

藤木兼政の神主と墓表の書式（第三十三葉～第三十四葉）

〔識語〕修敬／尚齋翁

〔内容〕修敬は「夫婦合葬之表」の識語にも出た岩崎守斎である。

誌石碑表之考（第三十五葉～第四十葉）

〔識語〕なし

木主題名説（第四十一葉～第四十三葉）

〔識語〕正徳三^{癸巳}年六月三日 尚齋識之／（中略）同前年月六日 尚齋識

〔内容〕木主（神主）の題名、すなわち表書きの書式に関する考証。六月六日の識語の記述によれば、六月三日に本説をまとめたあと「若林」すなわち若林強斎に意見を徴したところ、綱斎の説を教示されたという。

木主考説（第四十四葉～第五十五葉）

〔識語〕正徳三年癸巳孟冬二十一日／巖崎修敬書

〔内容〕木主（神主）の歴史に関する考証。文末に「木主考説跋」を載せ、末尾に右の識語を付す。正徳三年（一七一三）十月二十一日、岩崎守斎の著。

名字説（第五十六葉～第五十八葉）

〔識語〕正徳壬辰季冬念四日／巖崎修敬書

〔内容〕諱、名乗、実名、字、仮名、称号など、人名の称謂に関する考証。正徳二年（一七一二）十二月二十四日、岩崎守斎の著。

五稱之辨（第五十九葉～第六十五葉）

〔識語〕夜雨村撰／此書若州田中源ノ進所述而因佐久間氏需之書之

〔内容〕姓氏名字の五つの称謂に関する考証。夜雨村は一松昔櫻（一六五三—一七二五）で水戸藩士だった人物。「此書」とはこの「五稱之辨」をいうのであろう。若州は若狭小浜藩をいう。

このように、本書は『家礼』をめぐるさまざまな論考から成っているが、成立時期の明記されたもので最も早いのは正徳二年（一七一二）十二月、岩崎守斎による「名字説」であり、そのあと尚斎による翌正徳三年（一七一三）閏五月の『家礼』講義の識語、六月の「木主題名説」、八月の「喪服制度」、十月の「附位附祭諸図」、正徳五年（一七一五）の「読朱子家礼筆記」と続く。他の岩崎守斎や三輪執斎、一松昔櫻らの文章もおおむねこの頃に著わされたものであろう。またこれらの識語の所説から、この間、尚斎が岩崎守斎や秋岡立斎、若林強斎らと質疑をかわしつつ考察を進めていたことも知られる。つまりこの『家礼雑記』は尚斎を中心とする崎門派の人々が『家礼』につき検討した割記を集めたものということになる。

もう一つ注意すべきはここに収載される尚斎の「読朱子家礼筆記」と「祭礼」であり、これらを見る

と、のちに成立する『朱子家礼筆記』と一致する記述が多く、これらが『朱子家礼筆記』撰述のためのメモであったことを示している。

三 祭祀略礼

尚斎の『祭祀略礼』一冊は伊勢神宮附属神宮文庫に蔵されている。同文庫の整理番号は「一門一六三〇二」、大きさは二十三・八×十七センチ。内題に「尚齊先生 祭祀略礼」とあり、外題は「祭祀畧礼」とする。全十八葉の短篇で、すべて和文で書かれる。

この書の方針に関しては、冒頭の序に、

豺獺サヘモ本ニ報スルヲ知レハ、況ヤ人ヲヤ。然ニ今世ノ人先祖ヘ甚薄キシカタ心有ル人ハ深ク患ヘキヲニゾ侍ル。サレト唐ノ昔ノ礼法ハ今ノ日本ニハ其マ、ニテハ行ヒカタケレハ、今我邦ニ行ルヘキホトノ事ヲ考テ記ス如左

とあるように、「本ニ報スル」こと、すなわち冠婚喪祭のうち、祖先を祀る祭礼に関して、日本に適用しうる方を述べたものである。上述の『朱子家礼筆記』が『家礼』の忠実な注解だったのに対して、『家礼』の日本への応用を説いた著述ということになる。内容は祠堂と神主、晨謁、忌日や四時祭、斎戒などについて論じている。

著述時期については、末尾の識語に、

享保八癸卯七月日 右或人ノ需ニ應ジテ識／三宅尚齊

とあるので、京保八年（一七二三）七月、すなわち『朱子家礼筆記』の三年前に書かれたものとわかる。ここにいう「或人」とは、後述するように尚斎門人の吉武法命のことである。

また、この神宮文庫本には後半に「葬祭諺解」がついている。これも和文で書かれ、冒頭に、

此以下予ガ同志者ニ聞クトコロノ説ト間己ガ意ヲ附ス。葬祭ノ一助ニモナランカト云爾。

といい、以下、図入りで解説を加えている。「同志者」すなわち友人や門人の説にみずからの考えを附して「葬祭」実践の一助にしたというわけである。そしてこのあとに「祭礼」と題する和文の小篇がつくが、おそらくこれは独立した篇ではなく、「葬祭諺解」の中の祭礼部分ということであろう。また、最後の識語に「時 延享四^巳季穉良辰 予寫書焼下／米元忠真」とあって、字体が「葬祭諺解」と前半の「祭祀略礼」とでは同一であるところから、この書全体が延享四年（一七四七）に書き写されたものと見られる。ただし、延享四年は己巳ではなく丁卯で、二年後の寛延二年（一七四九）が己巳なので、この干支は誤写である。また筆写者の米元忠真については今のところ未詳である。

ところで、前半の「祭祀略礼」部分は関西大学総合図書館・中村幸彦文庫蔵の写本『祭祀略記』（L24**25

-46) 所載の「祭祀略記」とほぼ同じなので触れておきたい⁹⁾。ただし、末尾の識語が次のようにやや違っているのが注意される(図6)。

享保八年癸卯七月二十七日 應或人之需識／尚齋

右此書、吉武義質問於三宅先生、而先生尔之書也。家礼所抄亦無此書之外

寶曆六年丙子九月二十五日

これによって、「祭祀略礼」(神宮文庫本『祭祀略礼』の「葬祭諺解」を除く前半部分)は吉武義質の問いに対して尚齋が答えたものだったことがわかる。この人物は吉武法命(一六八三—一七五九)である。吉武は三宅尚齋門人で、名を義質もしくは団四郎といい、唐津藩儒であった。したがって尚齋の識語に「或る人の需めに応じて識す」という「或る人」とは、この吉武法命だったことになる。そして、尚齋死去後の宝暦六年(一七五六)九月、吉武はこの尚齋の遺した「祭祀略礼」に、さらに右のような識語をしたためたというわけである。吉武は、次に述べる『祭祠略記』の撰述にかかわった人物として留意されるべき人物である。

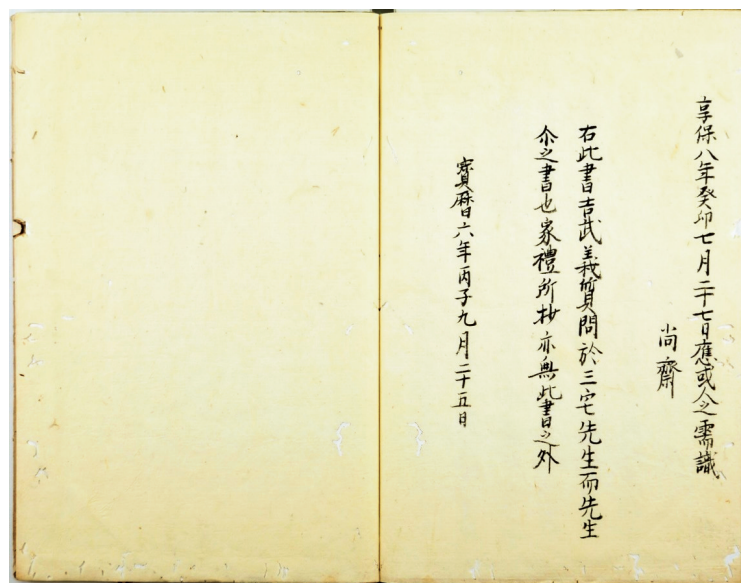


図6 関西大学総合図書館・中村文庫蔵『祭礼略記』巻末識語

四 祭祠略記

『祭祠略記』一冊は関西大学総合図書館・中村文庫蔵の写本で、請求記号はL24**25-47、大きさは二十

9) この中村文庫本『祭祀略記』は、前半の六葉が『朱子語類』や『二程全書』からの『家礼』関連記事の抜書きであり、後半の十葉が「祭祀略記」となっている。

七×十九・八センチ。内題は「三宅重固先生之説 祭祀畧記」、外題は「祭祀畧記」で、すべて和文で記され、全二十七葉からなる。

この書もまた『家礼』にもとづく祭礼の書であるが、内容を見ると前半と後半に分かれるようである。前半は「祠堂」条に始まり、神主のつくりや「奉祠之礼」、「忌日」と続く部分で、その末尾に、

右祭祠之説、三宅重固先生ノ説以テ記之

とあるので、ここまでは尚斎の説を門人が記したものであるとわかる。一方、後半はそのあとに続く部分で、最初に、

一 享保^{戊申}之年、味地丈京都ヨリ來テ留止數日、一日問答及于祭祠之事、如左

と、「味地丈」が京都から来て行なった問答の記録という。これに関しては、しばらく後に、

享保十三^{戊申}七月廿二日小牧氏ノ卒。同廿四日申刻葬唐津城外小林寺。時味地丈偶自京市來而在官舎。正義丈以予質葬事於味地丈、故與聞其畧。其説如左。

とあるのが注意される。右の第一の識語にいう「味地丈」とは前にも触れた味池修居であり、第二の識語にいう「正義丈」とは稲葉迂斎（一六八四—一七六〇）のことに違いない。稲葉は佐藤直方門人で、初名は通経、のち正義と改めた学者である。丈は一人前の男子に対する敬称である。

そもそもこの問答の場となったのは第二の識語に見るように九州肥前の唐津藩であるが、味池はちょうど享保十三年（一七二八）五月から翌年にかけて、唐津藩主土井利実（一六九〇—一七七六）の招きによって唐津を訪問しており¹⁰⁾、また、稲葉は正徳五年（一七一五）以来、土井利実に仕えた唐津藩儒であって、ちょうど問答のなされた享保十三年には三月から十月まで唐津に滞在していたことが他の資料によって確認できる¹¹⁾。

また味池や稲葉から葬祭儀礼について話を聞き、まとめた人物は吉武法命だった可能性が高い。というのも、当篇の「墓表之事」の条の墓誌銘の説明に「吉武團四郎法命之墓」と記されているからである。味池や稲葉に対する呼称とは違って、この箇所のみ本名（團四郎）を呼び捨てにしているのであって、おそらく墓誌銘の書法の例としてみずからの名を使ったものと推測される。そしてこの吉武もまた、『祭祀略礼』のところで述べたように唐津藩儒であった。

ついでにいえば、当時の唐津藩主土井利実は稲葉迂斎を登用してこれを優遇し、享保八年（一七二三）には藩校盈科堂を創設するなど儒学を奨励したことで知られる。この問答は、そのような崎門派を藩学とする環境のもとでなされ、記録されたことになる。

10) 川島右次「味池修居先生」（注6『増補 山崎闇斎と其門流』所収）二四一頁。

11) 梅澤芳男「稲葉迂斎先生事略」（注6『増補 山崎闇斎と其門流』所収）一一四～一一五頁。

考証がやや複雑になったが、ともあれ以上により、本書後半部分の記述は享保十三年七月、味池修居が唐津を訪れた際に、唐津藩儒であった吉武法命が味池や稲葉迂斎らの説を書き留めたものであることが明らかになったと思われる。そのことからすると本書前半部分もまた吉武が師尚斎の説を筆写したものかもしれない。いずれにせよ、本書には尚斎の説をはじめ、味池修居、稲葉迂斎、吉武法命ら崎門派を継承する人々による『家礼』解釈が盛り込まれているわけで、はなはだ貴重といわなければならない。図も多く挿入され、苦心のほどを示す内容となっている。

五 用神主説・神主題名考

『用神主説 神主題名考』一冊は財団法人無窮会・平沼文庫蔵の写本で、請求番号はその蔵書目録第二輯の九八七三。巻頭欄外に「内田氏圖書記」の印があり、内田周平旧蔵書と知られる。見返しには「尚斎先生所著」の書付けおよび「内田」印がある。巻末の識語によれば、明治三年に転写されたものである。

この書は外題には「用神主説／神主題名考」とあるが、実際には「用神主説」「大宗小宗図考」「神主題名考」の三種の文献から成っている。

一つ目の「用神主説」（全三葉）は神主の使用に関する考証論文を二篇載せたもので、中国において神主（木主）の使用は天子諸侯のみにのみ許され、士人や庶民は用いることができなかったという説をめぐる、朱熹や程頤、朝鮮の『家礼考証』、野田徳勝などの説をふまえつつその可否を論じている。野田徳勝（一六九〇—一七六八）は剛斎と号し、佐藤直方門人である。また各篇末には尚斎の識語が二つついており、享保十年（乙巳、一七二五）の作であることがわかる¹²⁾。

二つ目の「大宗小宗図考」（全十二葉）は大宗と小宗につき、朱熹『儀礼経伝通解』や綱斎説、丘濬『文公家礼儀節』などふまえ、図示しつつ解説したものである。

三つ目の「神主題名考」（全七葉）は神主の題名につき検討したもので、はじめの「神主題名式」では通常の場合と「無官爵名」の書式を掲げ、次の「我國主城主有官爵者題名式」では日本の国主・城主で官爵を持つ者の神主の書式を考証しており、『家礼』の日本への受容という意味でも興味深い。文末の尚斎の識語によれば享保八年（一七二三）に著わされたものである。

ちなみに、名古屋市蓬左文庫の「道学資講」巻八十五には尚斎の「神主題名式」のほか中村習斎（一七一九—一七九九）の「神主題名類説」および「神主制諸説」が収められている。このうち「神主題名式」（全七葉）は、いま紹介した無窮会・平沼文庫蔵「神主題名考」とほぼ同文であり、巻末の識語もまったく同じであるところから、おそらく共通の祖本からそれぞれ転写したものと思われる。

この道学資講は全四百巻、幕末に近い嘉永四年（一八五一）年、尾張藩儒の中村得斎（一七八八—一八六八）が道学関係の写本を集成したもので、日本朱子学とりわけ崎門派の著述の一大叢書となっていることはいうまでもない。「神主題名類説」および「神主制諸説」の作者中村習斎は、はじめ兄の厚斎と

12) 後の識語に「享保十年乙巳」の年次があるが、前の識語には「享保十一年乙巳」とある。これは干支からいって享保十年の誤りである。

ともに浅見綱斎門人の小出侗斎に学び、のち蟹養斎に師事する。養斎は三宅尚斎門人で尾張藩儒となった人物である。習斎は経学のほか、天文・地理・兵法・医術・律暦などに広く通じ、これまた尾張藩儒に任ぜられており、道学資講の編纂者得斎は習斎の兄厚斎の孫にあたる。

習斎の「神主題名類説」は、内題の前に、

祭礼小儀曰、吾 先輩題名式の冊あれども、未成の書にして全からず、學者ミづから看得る所ありて定れば、神にしたしく、正しとすべし

と記されているが、ここにいう先輩の題名式とは、直前に収載された尚斎「神主題名式」に違いない。「祭礼小儀」は他ならぬ中村習斎の著であって¹³⁾、習斎は尚斎の不備を補うという意図をもってこの「神主題名類説」をまとめたことになる。

この道学資講巻八十五に収める三宅尚斎と中村習斎の著作は、神主をめぐって多くの文献を引用しつつ考察を展開している。神主そのものの歴史的考証というばかりではなく、日本における神主の書式はどうあるべきか——いうまでもなく、官爵や親族の呼称が中国と日本では異なる——といった課題について、丁寧な論説を披露しているのである。これらはおそらく日本における神主研究として出色のものであり、尚斎および崎門派による『家礼』研究の重要な一成果といってよいと思われる。

13) 『祭礼小儀』は国会図書館のほか、九州大学附属図書館・碩水文庫、大倉山精神文化研究所に写本が所蔵されている。

